

# 日本神話の文化的継承と変容\*

－ 宮崎駿監督作「もののけ姫」を中心に －

洪 聖 牧\*\*

1997年にスタジオジブリが発表した宮崎駿監督作品の長編アニメーション「もののけ姫」の難解さは日本神話に伝えられている日本神話の世界観が盛り込まれていることに起因すると考える。それは、この作品の中に重要な役割をなす動物、すなわち猪・犬・鹿が日本神話で独自のイメージを持っており、本作品の理解に欠かせないからである。

日本神話には王者に死をもたらす存在として猪が登場する。だからこそ「もののけ姫」では、主人公アシタカに死の呪いをかける存在として猪が登場するようになったと考えられる。また古代日本人は白い犬には特別な能力があり、人を助ける動物であると観念されていたと思われたようである。そのため、アシタカとサンを助ける役割を為す動物として白い犬が選ばれたのであろう。鹿は日本で古くから神聖な存在でもあり、農作物を荒らす害獣のように認識される存在でもある。「もののけ姫」で描かれているシシ神の持つ「生と死」の両面性は、鹿の持つ神聖な動物としての側面と、農作物を荒らす害獣としての側面の現れであろう。即ち、シシ神はその姿だけでなく、その特性にも鹿の両面性が大きく反映されていると考えられる。

キーワード：もののけ姫、日本神話、猪、白い犬、鹿  
(모노노케히메, 일본신화, 멧돼지, 흰 개, 사슴)

## 1.はじめに

日本神話は、古代から日本の文化的・精神的な基盤とも言える。あらゆる文学や芸術において、主要なテーマとして扱われてきた。まさに日本文化の根幹を成すもので、現代においても、その影響は至ると

---

\* 이 논문은 2023년 울산대학교 연구비에 의하여 연구되었음.

\*\*蔚山대학교 人文大学 日本語・日本学科副教授、smhong2016@ulsan.ac.kr

ころに深く根付いている。それは日本のアニメの世界でも同様である。

本論でとりあげる宮崎駿監督作の『もののけ姫』は、1997年にスタジオジブリが発表した長編アニメーション映画作品で、そのあらすじは次のようである。

室町時代の頃の中世の日本を舞台とし、東と北の間にあると言われるエミシの村に住む少年アシタカは、村を襲った祟神と呼ばれる猪の化け物を退治した際に、右腕に死の呪いを受けてしまう。その正体は、何者かに鉛のつぶてを撃ち込まれ、人への憎しみから祟神と化した巨大な猪神(ナゴの守)だった。アシタカは、呪いを絶つ為に猪神が来た西の地へと旅立つ。その旅の先でアシタカは、山犬に育てられた人間の娘・サンや、タタラ場を治める女性・エボシ御前たちと遭遇する。鉄を作るために自然を破壊する人間と、それに争う自然の生き物たちとの戦いに、アシタカも巻き込まれていくのである。

この作品の舞台とする室町期は混乱と流動が日常の世界であった。南北朝からつづく下剋上、バサラの気風、悪行横行、新しい芸術の混沌の中から、今日の日本が形成されていく時代を背景にしている<sup>1)</sup>。その上に日本の歴史、地理、民族、生態系、宗教観などの概念を魅力的なキャラクター、映像の美しさ、優れた音楽性とともにより盛り込んでいるため、非常に人気を博した作品となった。『もののけ姫』は、映画館で公開してから興行収入193億円を記録し、当時『E.T.』が保持していた日本の歴代興行収入記録を塗り替えるほどだった。

ところが国内外から、『もののけ姫』の内容が理解しがたく非常に難解な作品だという評価も多い。例えば、1997年12月24日スポーツニッポンには「13万5千枚の原画を使った映像美の素晴らしさとスピード感にひかれた観客も多いが、アニメファンの中心である低年齢層を意識しなかった難解なストーリー展開がリピーターを大量に生み出し、大ヒットにつながった」と記されている。また1997年12月25日日経流通新聞では、「アニメとしては乱暴だと思う。まず、だれにむかってつくったという対象がはっきりしない。大人向けではないし、かといって、子供向けという訳でもない。作品からは、理解の助けになるよう

1) アニメージュ編集部(1997)『もののけ姫 (ロマンアルバム)』徳間書店、p.4.

な「説明」も多く排除した。…(中略)…その結果、わけがわからない部分もたくさんある」<sup>2)</sup>という宮崎駿とのインタビューが掲載されている。

さらに、20年以上が過ぎた今でもこの作品の難解さは有名で、2022年7月14日のイギリスでの「もののけ姫」放送を際して、BBC.comでは「この映画は、宮崎駿作品の中でも最も複雑な作品である。しかしこの作品が欧米でどのように扱われたのかが、日本と欧米の芸術の根本的な違いを物語っている」<sup>3)</sup>と評した。

このように、当時の新聞記事や宮崎駿本人のコメント、そして近年の海外の評価からも「もののけ姫」が如何に難解な作品であったかをよく窺える。それでは、「もののけ姫」の難解さを作り上げる要因は何であろうか。角一典氏は人間と自然との関係性の難しさを指摘し、次のように述べている。「人間が変えてしまった自然も、人間の思惑とは異なった形で新たなバランスを取り戻すこともある。原生自然こそが「絶対的に正しい」のではなく、また、偶発的に生まれた里山が「絶対的に正しい」のでもなく、バランスの取れた自然を肯定的に捉え、それを維持していくことこそが「正しい」環境認識、あるいは環境思想であると、ジブリ映画が訴えかけていることを私たちは知るべきである。」<sup>4)</sup>

また複雑な人間関係や賤民問題などにその難解さがあると、様々な先行研究が提示されている<sup>5)</sup>。しかし筆者は、この作品の難解さは『古

2) 金弘来(2012)「『もののけ姫』の葛藤構造における仏教説話の借用」『日本学研究所』36号、檀国大学校日本研究所、p.156.

3) Twenty-five years old this week, the film is Japanese animation master Hayao Miyazaki's most complex work. But how it was mishandled in the West speaks of fundamental artistic differences, writes Stephen Kelly.(BBC-Homepage, (<https://www.bbc.com/culture/article/20220713-princess-mononoke-the-masterpiece-that-flummoxed-the-us>))(閲覧日:2022.11.30)

4) 角一典(2016)「ジブリ映画の環境思想：日本の風土に関わる考察」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』66(2)、北海道教育大学、pp.73-88.

5) 히로세 에이코・권해주(2020)「미야자키 하야오(宮崎駿)의 『원령공주』(もののけ姫)에 나타난 가족관」『日本語教育』한국일본어교육학회, pp.201-202; 金弘来(2012)前掲論文、pp.155-156; 최종길(2011)「『모노노케 히메(もののけ姫)』를 통해본 일본의 천민과 천황제」『일어일문학』대한일어일문학회, pp.409-413; 김성숙・임부연(2013)「미야자키 하야오 작품 속의 생명사상과 존재론에 대한 연구: 『원령공주』에서 나타난 ‘숲’을 중심으로」『생태유아교육연구』12(4), 한국생태유아교육학

事記』や『日本書紀』、『風土記』などに伝えられている日本神話の世界観が盛り込まれていることに起因すると考える。それは、この作品の中に重要な役割をなす動物、すなわち猪・犬・鹿が日本神話で独自のイメージを持っており、本作品の理解に欠かせないからである。

## 2. 英雄に死をもたらす猪

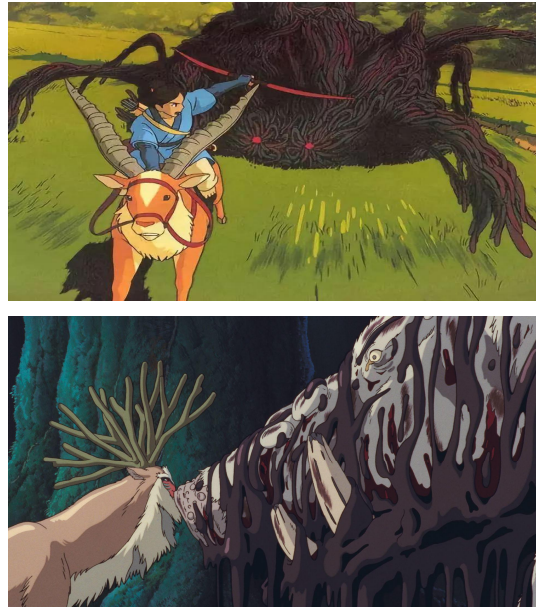
「もののけ姫」の序盤に赤黒い触手の塊のような巨大な怪物が森の中から登場する。触れる者全てを腐らせ死に至らしめる尋常ではない瘴気を発し、自らを傷つける者には呪いをかける。その姿は土蜘蛛<sup>6)</sup>のようで、変幻自在に触手を体の横から伸ばして脚を形成し、猛スピードで移動したり、邪魔者を薙ぎ払ったり、垂直に近い岸壁を這ったり、機械的に方向転換したりと、まるでクモの化け物の如く暴れ回る。その正体は古い神が怒りや悲しみ、憎しみといった負の感情に侵され、野山に満ちる邪気を取り込んだ結果変生する荒ぶる神(祟神)そのもので、本作中では2体確認されているが、どちらも元は猪であった。

「もののけ姫」の主人公アシタカは、村を襲った祟神と呼ばれる猪を退治した際に、右腕に死の呪いを受ける。つまり、アシタカに死をもたらししたのは猪である。ではなぜ猪が死のイメージをもって登場したのだろうか。

---

회, pp.123-149; 정재필(2019) 「애니메이션에 배경으로써 표현된 숲의 이미지 분석 : 「이상한 나라의 앨리스」, 「원령공주」를 중심으로」『한국콘텐츠학회 논문지』 19(9), 한국콘텐츠학회, pp.144-151.

6) 天皇への恭順を表明しない土着の豪傑・豪族・賊魁などに対する蔑称として用いられていた。(日本国語大辞典刊行会(1981)『日本国語大辞典』第7巻、小学館、p.723.)



【図 1】アシタカを襲う祟神に化した猪と、猪神の乙事主<sup>7)</sup>

まず『古事記』のオオクニヌシのエピソードをみてみよう。オオクニヌシは地上世界を完成させた日本神話の英雄である。『古事記』によれば、オオクニヌシが稲羽のヤカミヒメを得ようとする兄弟の八十神の従者として稲羽へ行くことになった。稲羽に行く途中、オオクニヌシが白兔を正しい治療法で救い、白兔はオオクニヌシがヤカミヒメを得ると预言する。ヤカミヒメは八十神の求婚を拒否し、八十神にオオクニヌシと結婚することを伝える。これを聞いて激怒した八十神は謀議しオオクニヌシを殺そうとした。伯岐の国の手間の山本というところに来て、八十神はオオクニヌシに「この山に赤い猪がいる。私たちが山の上から追い立てるので、お前は下で待っていて捕まえるのだ。もし捕まえることができなければ、お前を殺してしまうぞ。」と言った。そして八十神は猪に似た大きな石を焼き、山の上から転がり落と

7) スタジオジブリ無償提供写真 <https://www.ghibli.jp/works/mononoke/#frame>(閲覧日:2023.04.20)

したところ、それを捕まえようとしたオオクニヌシは死んでしまう。

是に八上比売<sup>やがみひめ</sup>、八十神<sup>やそ</sup>に答へて言ひしく、「吾は汝等<sup>いましたち</sup>の言は聞  
かじ。大穴牟遲神<sup>おほなむぢ</sup>に嫁<sup>あ</sup>はむ。」といひき。故爾に八十神怒りて、大  
穴牟遲神を殺さむと共に議<sup>はか</sup>りて、伯伎国<sup>ははき</sup>の手間<sup>てま</sup>の山本に至りて云ひ  
しく、「赤き猪此の山に在り。故、和礼此の二字は音を以るよ。共  
に追ひ下<sup>おろ</sup>しなば、汝<sup>なれ</sup>待ち取れ。若し待ち取らずば、必ず汝を殺さ  
む。」と云ひて、火を以ちて猪に似たる大石を焼きて、転<sup>まろ</sup>ばし落し  
き。爾に追ひ下すを取る時、即ち其の石に焼き著<sup>つ</sup>かえて死にき。<sup>8)</sup>

(『古事記』因幡の白兔)

この後、オオクニヌシは母親の助力によって復活し、スサノヲの娘と神器を得て地上世界(葦原中国)の支配者となる。このオオクニヌシの死は若き英雄の試練の一つとして位置づけられるが、それを齎したのは猪であった。つまり古代日本人にとって、猪は死の象徴として認識されていたと思われる。

次は古代日本の英雄のヤマトタケルを死に追いやった猪の逸話である。ヤマトタケルが伊服岐能山の神を退治しに行った際、「この山神は素手で直接とってやろう」と言って、その山に登っていった。そして山之辺のところで白猪に出会うのだが、その大きさは牛ぐらいもあった。ここでヤマトタケルは「この白猪に化けているのは山神の使者であろう。いまはとらないけれど、還りのときにとってやろう」といって登っていった。ここでその白猪は大氷雨を降らせて、ヤマトタケルを打ち惑わした。この白猪は山神の使者ではなくて、まさしく山神の正体だったのである。そしてヤマトタケルは、この時受けた傷が原因で死んでしまう。ここでも猪によって死が齎されている。

8) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958)『岩波日本古典文学大系 古事記 祝詞』岩波書店、pp. 94-95.

故爾に御合<sup>みあひ</sup>したまひて、其の御刀<sup>みはかし</sup>の草那芸劔を、其の美夜受  
 比売<sup>いひよきの</sup>の許に置きて、伊服岐能山<sup>いふきの</sup>の神を取りに幸行<sup>い</sup>でましき。是に  
 詔りたまひしく、「茲<sup>むなで</sup>の山の神は、徒手<sup>ただ</sup>に直に取りてむ。」とのり  
 たまひて、其の山に騰<sup>のぼ</sup>りましし時、白猪<sup>しろみ</sup>山の邊に逢<sup>あ</sup>へり。其の大  
 きさ牛の如くなりき。爾に言<sup>こと</sup>挙<sup>あ</sup>げて詔りたまひしく、「是の白猪  
 に化れるは、其の神の使者<sup>つかひ</sup>ぞ。今殺さずとも、還らむ時に殺さ  
 む。」とのりたまひて騰り坐しき。是に大水雨<sup>おほひさめ</sup>を零<sup>ふ</sup>らして、倭建命  
 を打ち惑<sup>まど</sup>はしき。此の白猪に化れるは、其の神の使者に非ずて、  
 其の神の正身に当りしを、言挙に因りて惑はさえつるなり。9)

(『古事記』ヤマトタケル)

次は応神天皇の即位前に起きた香坂王と忍熊王の反乱の話である。筑紫の国で、滞在中の仲哀天皇が逝去し、後継は神功皇后と建内宿禰によって神功皇后の子のホムタワケ(応神天皇)に決定される。そのことを知った香坂王と忍熊王はただちに支配地に戻り、戦いの準備をする。最年少の弟が天皇に即位することに対し、香坂王と忍熊王は不満を抱いていたのである。時に、香坂王と忍熊王は一緒に斗賀野に出て、ウケヒ狩り(狩の結果で占うこと)をしに仮の棧敷にいた。すると赤い猪が急に出て来て、棧敷に登って香坂王を食い殺してしまう。軍勢はみな恐れをなし、結局反乱は失敗に終わる。全集や大系などの主な注釈書では、荒ぶる猪を狩ることが王者の力を誇示するものであり、そうした狩りを戦の前に行ったという「ウケヒ狩り」においては、猪がその対象として認識されていたと説明しているが<sup>10)</sup>、『古事記』において、英雄(もしくは王者)による猪狩りが成功した例はまったくない。

9) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.219.

10) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.220.

如此上り幸でます時、香坂王、忍熊王聞きて、待ち取らむと  
 思ひて、斗賀野に進み出でて、宇気比獵を為き。爾に香坂王、  
 歴木に騰り坐て是るに、大きなる怒猪出でて、其の歴木を堀り  
 て、即ち其の香坂王を咋ひ食みき。其の弟忍熊王、其の態を畏ま  
 ずて、軍を興して待ち向へし時、喪船に赴きて空船を攻めむとし  
 き。爾に其の喪船より軍を下ろして相戦ひき。11)

(『古事記』 応神天皇)

もう一つの例は、猪の遭遇したが木の上に逃げ登って死を逃れた雄  
 略天皇の逸話である。ある時、雄略天皇が葛城の山に登っていると大  
 きな猪が出てきた。天皇は鎬矢でその猪を射ったが倒すことができ  
 ず、その猪は怒って天皇に向かって突進してやって来た。すると天皇  
 は怖がって榛の上に逃げて、「我が大君が、狩りをした猪が傷付いて  
 病んだ猪が、怒って唸った。それが怖くて私が逃げて登ったあの丘の  
 榛の木の枝よ」と歌ったのである。

一時、天皇葛城の山の上に登り幸でましき。爾に大猪出で  
 き。即ち天皇鳴鎬を以ちて其の猪を射たまひし時、其の猪怒り  
 て、宇多岐依り来つ。宇多岐の三字は音を以るよ。故、天皇其の  
 宇多岐を畏みて、榛の上に登り坐しき。爾に歌曰ひたまひしく、  
 やすみしし 我が大君の 遊ばしし 猪の病猪の 唸き畏み 我が  
 逃げ登りし在丘の榛の木の枝とうたひたまひき。12)

(『古事記』雄略天皇)

このように、『古事記』には「赤き猪」を獲るかわりに焼けた大石に

11) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、pp.234-235.

12) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、pp.316-317.

よって焼き殺されたオホクニヌシ、牛の如く大きい「白猪」に化けた伊吹山の神に打ち負かされ、それが原因で死に至ったヤマトタケル、神功皇后に反旗を翻したが「大きな怒猪」により食い殺された香坂王、木に登り猪から死を逃れた雄略天皇の物語など、王者に死をもたらす存在として猪が登場する。

実際、猪はかなり危険な猛獣である。平均体長は約1.5m、平均体重は約100kgにもなり、雌雄ともに下顎の犬歯が発達し、大きな牙として口外に突き出している。運動神経もよく、時速40kmの速さで走ることができ、1mほどの高さであれば助走をつけずに飛び越えることができるという脅威の身体能力をみせる。猛烈な加速をつけて突進してくるのはかなりの脅威であり、人間に大怪我をさせ、死に至らしめることさえもある。古代から日本人にとって猪は、人間に害をなす恐ろしい存在であり、死を齎すイメージをもっていたと思われる。

だからこそ「もののけ姫」では、主人公アシタカに死の呪いをかける存在として猪が登場するようになったのではないかと考えられる。

### 3. 主人公を助ける白い犬

「もののけ姫」には3頭の白い犬が登場する。もう一人の主人公のサンが「母さん」と呼ぶ「モロ」と2頭のモロの子で、サンとともに行動をしていたが、後にアシタカも助ける存在である。モロはシシ神の森を守護している白の毛色に二尾の大きな犬神で、人語を解し、高度な知能と強靱な生命力を持つ存在として描かれている。森を侵し破壊する人間を憎みつつも、自身に捧げる生贄として捨てて寄越したサンを殺すことなく、二匹の実子と共に娘として育てた。アシタカは、サンがエボシ御前に返り討ちにされたところを救ったときに受けた傷を回復する間、モロのねぐらの石室で何日も寝ていた。ようやく目を覚まして石室の外に出てきたアシタカは、屋根の上にいたモロと対峙する。

サンは犬神の一族の娘として森が死ぬときはともに亡びる、と言うモロに、アシタカは「あの子を解き放て。あの子は人間だぞ。」と叫ん

だ。そのアシタカを「黙れ小僧。お前にあの娘の不幸が癒せるのか。」とモロは一喝。「人間にもなれず山犬にもなりきれぬ」サンを救うことがアシタカにできるか、と言った。これに対してアシタカは戸惑いながらも「ともに生きることはできる」と答える。後でモロは、サンに「あの若者と生きる道もあるのだが」といい、最終局面では2頭のモロの子が各々アシタカとサンを乗せ、彼らを助ける。

このように「もののけ姫」の中の3頭の白い犬は、ストーリー上主人公たちを助けるポジションに収まっていることがわかる。ではなぜ主人公たちを助ける役に白い犬が登場するのだろうか。



【図 2】 アシタカとサンと白い犬<sup>13)</sup>

白い動物は東アジアでは古くから神聖視されており、日本も歴史上神の化身あるいは神の使い、または祥瑞の象徴とされ、古代の諸文献に

13) スタジオジブリ無償提供写真 前掲資料。

登場している。中国では白い雉、白い鹿、白い兎などが朝廷に献上された記録があり、韓国では新羅の王の赫居世と金閼智の誕生に白い馬と白い鶏が登場するほか、白い鹿、白い鵲、白い牛などを祥瑞とした。日本でも『古事記』の因幡の白兎の神話や、『日本書紀』の大化6年には孝徳天皇が白い雉の献上を受け、中国・朝鮮半島のお話にならってそれを祥瑞とし、元号を「大化」から「白雉」に改めたという話が伝えられている。

そして白い犬の場合『日本書紀』『風土記』『今昔物語集』でその記事が確認できる。

山の神、王を苦しめむとして、白き鹿と化りて王の前に立つ。王異びたまひて、一箇蒜を以て白き鹿に弾けつ。則ち眼に中りて殺しつ。爰に王、忽に道を失ひて、出づる所を知らず。時に白き狗、自づからに來て、王を導きまつる状有り。狗に随ひて行てまして、美濃に出づること得つ。14)

(『日本書紀』景行天皇四十年是歲)

その時、印南の別嬪、聞きて驚き畏み、即て南田比都麻嶋に通げ度りき。天皇、乃ち賀古の松原に到りて、覓ぎ訪ひたまひき。ここに、白き犬、海に向きて長く吠えぬ。天皇、問はしたまはく、「是は誰が犬ぞ」と問はしたまふに、須受武良首、對へてまをさく、「是は別嬪が養へる犬なり」とまをす。天皇、勅して「好く告げつるかも」とのりたまひき。故、告首と号く。15)

(『播磨国風土記』賀古郡日岡)

其家ニ白キ犬ヲ飼ケルガ、前ノ尾ヲ打振テ居リケルニ、其前ニテ、此蚕ヲ物ノ蓋ニ入テ、桑咋ヲ見居程ニ、此犬立走テ寄來テ、此

14) 坂本太郎・他校注(1967)『岩波日本古典文学大系 日本書紀 上』岩波書店、pp.307-308.

15) 秋元吉郎校注(1958)『岩波日本古典文学大系 風土記』岩波書店、pp.259-260.

蚕ヲ食ツ。16)

(『今昔物語集』巻四「参河国始犬頭糸語 第十一」)

まず『日本書紀』の逸話は山の神に負けてしまい、道に迷ったヤマトタケルの前に白い犬があらわれ、彼を導いたという伝承である。後にヤマトタケルは現在の埼玉県秩父市三峰に登って、イザナギとイザナミの国造りを偲んで三峯神社を造ったと伝えられている。その地にヤマトタケルを導いたのが白い犬であったため、白い犬を神社の守護神として祭っており、「おいぬさま」と呼ばれている。

次の『播磨国風土記』では、景行天皇は印南別嬢を妻問いに播磨へと出向いた。天皇の求婚を畏れた別嬢は、島に逃げ込み身を隠したが、白い犬が現れ別嬢の居場所を天皇に教え、2人は城宮で結ばれたという話である。

最後の『今昔物語集』の説話では、だったひとつ残った蚕を飼っていた白い犬が食ってしまい、呆然として泣き出した飼い主の前で犬の鼻から白い糸が出始めた。4~5千両ばかり巻き取ったところで糸は尽き、犬は倒れてしんでしまう。これは仏神が犬に化して助けてくれたと思い、飼い主は犬を桑の木の下に葬った。犬の鼻から出たの糸は白く光る、すばらしい糸だったと伝える。この説話の最後には「此糸ヲバ藏人所ニ被納テ、天皇ノ御服用ニハ被織也ケリ。」と、その犬頭糸と呼ばれた白い糸が天皇の御服用とされたと伝える。犬頭糸が天皇の衣服用に用いられたのは事実で、『延喜式』巻二十四の主計上に、夏の調の糸を貢進する国々の中に、三河産の糸に「参河二千紬。犬頭糸。」という記録が付していることから確認できる。

このように、白い犬は特別な能力（あるいは霊力）のある動物と観念されていたと思われたようである。古代人は、様々な動物を不思議な能力をもつものと認識し、畏怖の念を持ち、場合によっては神または神の使いとも考えてきた。それに加えて白という色は神聖視され、それによって白い動物も祥瑞と見做された。

16) 山田孝雄・他校注(1962)『岩波日本古典文学大系 今昔物語集 四』岩波書店、pp.445-446.

白い犬は記紀や風土記を見る限り、天皇や皇子を導くなど、重要人物(主人公)を助ける霊獣としての一面をあらわしていることがわかる。ところが時代が下ると、白い犬に対する認識は少し変わっていったようだ。もちろん『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの説話集や、民間信仰・伝承などでは白い犬が不思議な能力を発揮する神聖な動物として登場するエピソードが数多く伝えられているが、少なくとも朝廷レベルではそういう認識は薄れていったと考えられる。『日本書紀』雄略天皇十三年秋八月条に、播磨の賊文石小磨呂が馬の大きさの白い犬に化けて官軍に抗したのを、春日小野臣大樹が斬りおわると、もとの小磨呂となったと伝える。

秋八月に、播磨国の御井隈の人文石小磨呂、力有り心強しといふ。行ふこと肆にして暴虐す。路中に抄劫しつつ、行を通はしめず。又商人の舟を断へて、悉に以て奪ひ取る。兼ねて国の法の違ひて、租賦を輸らず。是に天皇、春日小野臣大樹を遣して、敢死士一百を領て、並に火炬を持ちて、宅を囲みて焼かしむ。時に火炎の中より、白き狗、暴に出でて、大樹臣を逐ふ。其の大きさ、馬の如し。大樹臣、神色恋らずして、刀を抜きて斬りつ。即ち文石小磨呂に化為りぬ。<sup>17)</sup>

(『日本書紀』雄略天皇十三年秋八月)

これはこの頃、すでに白い犬は吉兆に限らなくなったことをよく示している逸話であると考えられる。おそらく罪を犯して死んだ人が犬や牛などに転生するという仏教の影響もあって、動物の神聖性が薄れていったによるものであろう。

このような白い犬に関するイメージの変化は、「もののけ姫」の中で

17) 坂本太郎・他校注(1967) 前掲書、pp.488-489.

もあらわれている。モロの「森と生き森が死ぬときはともに滅びる」「私はここで朽ちていく体と森の悲鳴に耳を傾けながら、あの女を待っている」というセリフから、山の神のような存在でありながら、最後は人間に敗れ姿を消す古い神の姿が反映されていると思われる。

#### 4. 神の使者の鹿

「もののけ姫」では物語の鍵を握る存在として、鹿の神様であるシシ神が登場する。シシ神は「生と死」を司る自然神であり、「シシ神の森」の象徴とも言える存在である。普段は単独で行動しているが、時には普通の鹿の群れと行動している。作中では、アシタカが銃で撃たれて瀕死の状態になった際、そんなアシタカの傷をシシ神が癒すシーンがある。



【図 3】シシ神<sup>18)</sup>

18) スタジオジブリ無償提供写真 前掲資料.

鹿の神様の呼び名であるシシ神の「シシ」という言葉の由来について確認してみよう。鹿を意味する日本語には、現在一般に使われる「<sup>しか</sup>鹿」のほかに、「カ」「シシ」「カノシシ」などがある。<sup>かしま</sup>鹿島のような地名などの当て字や、「<sup>かのこ</sup>鹿子」「<sup>めか</sup>牝鹿」などの語に残るように、古くは「カ」の一音で鹿を意味していた。一方では、古くから肉を意味する語に「シシ（肉、穴）」があり、この語はまた「狩猟によって肉が獲られる動物」の意味として用いられた。主に「<sup>しか</sup>か」は鹿、「<sup>いのしし</sup>ゐ」は猪のことであったが鹿も猪も「シシ」と呼ばれていた。それは『万葉集』に「鹿猪」と書いて「シシ」と訓んでいたことから確認できる<sup>19)</sup>。時代が下るにつれて各々の言葉に「シシ」を添えて、鹿は「カノシシ」、猪は「<sup>いのしし</sup>キノシシ」と呼ぶようになった。現在「カノシシ」の方は廃語となって使われていないが、「<sup>ししおど</sup>鹿威し」「<sup>ししおど</sup>鹿踊り」の形で残されている。「もののけ姫」で「シシ神の森」に鹿の神と猪の神が登場するのは、古代から日本では鹿と猪が「シシ」と呼ばれていたことによるものと考えられる。

では「もののけ姫」でなぜ鹿を物語のキーを握る神さまとして描かれているだろうか。「もののけ姫」に登場するシシ神の姿は、宮崎監督が奈良公園で見た鹿が発想のきっかけになっている。1994年秋にスタジオジブリは社員旅行で奈良に行っており、その時に見た印象から生まれたものといわれている<sup>20)</sup>。そして神道では、鹿を神または神の使いの神聖な動物として考えられているため、宮崎監督の中で結びついたのでないかと思われる。ならば古来日本人の持つ鹿に対するイメージはどういうものであろうか。

日本神話には様々な場面で鹿が登場するが、最も有名なのは『古事記』

19) かけまくも あやに恐し わが大君 皇子の命 もののふの 八十伴の男を 召し集へ あどもひたまひ 朝狩に <sup>いし</sup>鹿猪踏み起こし… (中略) (巻3・478)

魂合へば 相寝るものを 小山田の <sup>いし</sup>鹿猪田守るごと 母し守らすも (巻12・3000)

20) スタジオジブリ STUDIO GHIBLI公式Twitter ([https://twitter.com/JP\\_GHIBLI](https://twitter.com/JP_GHIBLI)) (閲覧日:2022.11.30)

に登場する鹿の神アメノカクであろう。アメノカクの「迦久<sup>カク</sup>」という名前の解釈には諸説あるが、「鹿兒<sup>カコ</sup>」が転じて鹿の神と考え、鹿が水を渡ることを得意とすることに由来するという。またアメノカクは、水を泳ぐことで異界を超える能力に長けた、鹿の装いをしたシャーマンとする説もある。

高天原にいるアマテラスは、オオクニヌシが治めている地上世界の葦原中国は、自分の子が治めるべきであると宣言し、オオクニヌシに国を譲るように求める使者を送ることにする。ところが、二度にわたって派遣した使者のアメノホヒとアメノワカヒコがオオクニヌシに寝返ってしまう。そこで再三の使者として天安河の上流の天岩戸に居る、イツノオハバリもしくはその子供のタケミカヅチを派遣するべきという思金神などの神々の進言があった。しかしこのイツノオハバリは、天安河の水を塞ぎ止めて逆流させ、道をふさいでいるので、他の神は進むことができなかった。そこで選ばれたのがアメノカクという鹿の神であった。鹿のように崖や絶壁など、険しいところも駆け上がることのできる能力を見込まれたためであろう。アメノカクは無事イツノオハバリの居るところにたどり着き、交渉するとタケミカヅチが使者の役目を引き受け地上に行くことになった。タケミカヅチはオオクニヌシとその息子たちを制圧し、地上世界はアマテラスの子孫が治めることに決ったのである。

このように、鹿の神であるアメノカクの活躍によって困難だった地上征伐を成し遂げたタケミカヅチを派遣することができ、その後アマテラスの孫のホノニギが地上に降臨し、その子孫が天皇となり日本を統治するようになる。

是に天照大御神、詔りたまひしく、「亦曷<sup>いづ</sup>れの神を遣はさば吉けむ。」とのりたまひき。爾に思金神及諸の神白ししく、「天安河の河上の天の石屋に坐す、名は伊都之尾羽張神、是れ遣はすべし。伊都の二字は音を以るよ。若し亦此の神に非ずば、其の神の子、建御雷<sup>たけみかづちのを</sup>之男神、此れ遣はすべし。且其の天尾羽張神は、逆に

天安河の水を塞<sup>せ</sup>き上げて、道を塞きて居る故に、他神は得行か  
じ。故、別に天迦久神<sup>あめのかく</sup>を遣はして問ふべし。」とまをしき。21)  
(『古事記』葦原中国平定)

こうした『古事記』の伝承により、鹿は神様または神の使と認識されるようになったと思われる。特に鹿とタケミカヅチとの結び付きは現代まで続いている。タケミカヅチは藤原氏の祖先神とされ、茨城県の鹿島神宮に祀られることになったため、鹿島神宮の鹿は神の使として手厚く保護されている。後に国の安寧を願って奈良に春日大社が創建されるにあたり、招かれることとなる。春日大社の縁起によれば、この時タケミカヅチは白い鹿に乗って鹿島から奈良へ向かったと伝えられる。そのため春日大社や奈良公園の鹿は神の使として大切にされており、特に奈良公園の鹿は1957年9月に国の天然記念物として指定されているほどである。

鹿の神聖性をうかがえるもう一つの例が古代日本で行われていた占いの一つの「フトマニ」である。獣骨を用いたト占であるが、中国または朝鮮半島から持ち込まれたとみられ、弥生時代から平安時代にかけての遺跡で骨トに使用したト骨が多く出土しており22)、『古事記』や『日本書紀』にその記述が記載されている。使用された獣骨の多くは鹿のもので、鹿トまたは鹿占とも呼ばれた。鹿の肩甲骨を焼き、その亀裂の形や大きさに吉凶を判断した。このため、鹿は神聖な動物として扱われていたと思われる。

爾に天つ神の命以ちて、布斗麻迹<sup>フトマニ</sup>爾上此の五字は音を以る  
よ。ト相ひて、詔りたまひしく、「女先に言へるに因りて良から  
ず。亦還り降りて改め言へ。」とのりたまひき。23)  
(『古事記』国産み)

21) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.120.

22) 江坂輝弥・坂詰秀・芹沢長介(2005)『新日本考古学小辞典』ニューサイエンス社、pp. 379-380.

23) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.55.

是に天皇<sup>うれ</sup>患ひ賜ひて、御寝<sup>みね</sup>しませる時、御夢<sup>さと</sup>に覺して曰りたまひけらく、「我が宮を天皇の御舎の如修理りたまはば、御子必ず真事<sup>まこと</sup>登波牟<sup>とほむ</sup>。登より下の三字は音を以るよ。」とのりたまひき。如此覺したまふ時、布斗摩迹<sup>フトマニ</sup>迹占相ひて、何れの神の心ぞと求めしに、爾の祟は出雲の大神の御心なりき。24)

(『古事記』崇神天皇)

かく依さしまつりしまにまに聞しめす齋庭<sup>ゆには</sup>の瑞穂<sup>みづほ</sup>を、四国のト部等<sup>うらべども</sup>、太兆<sup>フタノ</sup>のト事をもちて仕へまつりて、悠紀<sup>ゆき</sup>に近江の国の野洲<sup>やす</sup>、主基<sup>すき</sup>に丹波の国の氷上<sup>ひかみ</sup>を齋ひ定めて、25)

(『古事記』推古天皇)

一方で古くから鹿は食べる対象でもあり、農作物を荒らす害獣でもあった。それは農業生産の始まりにより、鹿には農作物を荒らす害獣という性格が加わったからである。農業生産の拡大に伴って人と獣とのせめぎ合いが始まったとも言える。江戸時代の前期、17世紀初めから18世紀初めにかけて日本の人口は約2倍に増加したと言われ、耕作地の拡大が進んだ。その結果鹿などの野生動物と農業生産活動との軋轢は著しく増大し、江戸の中期には農作物を守るための「シシ垣」が全国各地で大規模に建設されたほどであった。

また現代の林業被害の方についてみれば、鹿による被害が毎年増加し、最近は数千ヘクタールの高い水準を保っており、獣害の中ではもっとも多い。鹿は枝葉摂食だけでなく、幅広い林齢の造林木に対して角こすりや摂食による剥皮を行う。このため、算定される被害額も大きい。主要哺乳類による被害の状況は、鹿が一番多く、カモシカ、猪、猿、熊などの順である26)。

このように鹿は、日本で古くから神聖な存在でもあり、農作物を荒

24) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.188.

25) 倉野憲司・武田祐吉校注(1958) 前掲書、p.462.

26) 環境省 第二種特定鳥獣管理計画作成のためのガイドライン(ニホンジカ編)改定版  
(<https://www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2e/>)

らす害獣のように認識される存在でもある。「もののけ姫」で描かれているシシ神の持つ「生と死」の両面性は、鹿の持つ神聖な動物としての側面と、農作物を荒らす害獣としての側面が現れていると考えられる。即ち、シシ神はその姿だけでなく、その特性にも鹿の両面性が大きく反映されているといえるだろう。

## 5. おわりに

以上のように、1997年にスタジオジブリが発表した宮崎駿監督作品の長編アニメーション「もののけ姫」について、日本神話の文化的変容に注目して考察してみた。この作品の難解さは『古事記』や『日本書紀』、『風土記』などに伝えられている日本神話の世界観が盛り込まれていることに起因すると考える。それは、この作品の中に重要な役割をなす動物、すなわち猪・犬・鹿が日本神話で独自のイメージを持っており、本作品の理解に欠かせないからである。

日本神話には「赤き猪」を獲るかわりに焼けた大石によって焼き殺されたオホクニヌシ、牛の如く大きい「白猪」に化けた伊吹山の神に打ち負かされ、それが原因で死に至ったヤマトタケル、神功皇后に反旗を翻したが「大きな怒猪」により食い殺された香坂王、木に登り猪から死を逃れた雄略天皇の物語など、王者に死をもたらす存在として猪が登場する。だからこそ「もののけ姫」では、主人公アシタカに死の呪いをかける存在として猪が登場するようになったと考えられる。

古代日本人は白い犬には特別な能力があり、人を助ける動物であると観念されていたと思われたようである。ヤマトタケルを危機から救い、景行天皇の妻問いを助けたのは白い犬であった。そのため、アシタカとサンを助ける役割を為す動物として白い犬が選ばれたのであろう。

日本神話に登場するアメノカクのように、鹿は日本で古くから神聖な存在でもあり、農作物を荒らす害獣のように認識される存在でもある。「もののけ姫」で描かれているシシ神の持つ「生と死」の両面

性は、鹿の持つ神聖な動物としての側面と、農作物を荒らす害獣としての側面が現れていると考えられる。即ち、シシ神はその姿だけでなく、その特性にも鹿のも両面性が大きく反映されているといえるだろう。

宮崎駿監督作の『もののけ姫』は、難解な作品と評されながらも国内外問わず非常に人気を博した作品となった。筆者はその理由について、日本独自の歴史、地理、民族、生態系、宗教観に加え、日本神話の概念がうまく盛り込まれているからであると思われる。そのため『もののけ姫』は、日本神話の文化的継承と変容をよくあらわしている作品であると判断する。

## 参考文献

- 김성숙·임부연(2013) 『미야자키 하야오 작품 속의 생명사상과 존재론에 대한 연구: 『원령공주』에서 나타난 ‘숲’을 중심으로』 『생태유아교육연구』12(4), 한국생태유아교육학회, pp.123-149.
- 정재필(2019) 『애니메이션에 배경으로써 표현된 숲의 이미지 분석: 『이상한 나라의 앨리스』, 『원령공주』를 중심으로』 『한국콘텐츠학회 논문지』19(9), 한국콘텐츠학회, pp.144-151.
- 최종길(2011) 『『모노노케 히메(もののけ姫)』를 통해본 일본의 천민과 천황제』 『일어일문학』 대한일어일문학회, pp.409-413.
- 히로세 에이코·권해주(2020) 『미야자키 하야오(宮崎駿)의 『원령공주』(もののけ姫)에 나타난 가족관』 『日本語教育』 한국일본어교육학회, pp.201-202.
- 秋元吉郎校注(1958) 『岩波日本古典文学大系 風土記』 岩波書店, pp.259-260.
- 江坂輝弥·坂詰秀·芹沢長介(2005) 『新日本考古学小辞典』 ニューサイエンス社, pp.379-380.
- アニメージュ編集部(1997) 『もののけ姫 (ロマンアルバム)』 徳間書店, p.4.
- 金弘来(2012) 『『もののけ姫』の葛藤構造における仏教説話の借用』 『日本学研究』36号、檀国大学校日本研究所, p.156.
- 倉野憲司·武田祐吉校注(1958) 『岩波日本古典文学大系 古事記 祝詞』 岩波書店, pp.94-95.
- 角一典(2016) 『ジブリ映画の環境思想: 日本的風土に関わる考察』 『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』66(2)、北海道教育大学, pp.73-88.
- 坂本太郎·他校注(1967) 『岩波日本古典文学大系 日本書紀 上』 岩波書店, pp.307-308.
- 日本国語大辞典刊行会(1981) 『日本国語大辞典』第7巻, 小学館, p.723.
- 山田孝雄·他校注(1962) 『岩波日本古典文学大系 今昔物語集 四』 岩波書店, pp.445-446.
- 環境省 第二種特定鳥獣管理計画作成のためのガイドライン(ニホンジカ編) 改定版

([https:// www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2e/](https://www.env.go.jp/nature/choju/plan/plan3-2e/))

スタジオジブリ無償提供写真(<https://www.ghibli.jp/works/mononoke/#frame>)

スタジオジブリ STUDIO GHIBLI公式Twitter([https://twitter.com/JP\\_Ghibli](https://twitter.com/JP_Ghibli))(閲覧日:  
2022.11.30)

BBC-Homepage(<https://www.bbc.com/culture/article/20220713-princess-mononoke-the-masterpiece-that-flummoxed-the-us>)(閲覧日:2022.11.30)

〈Abstract〉

## Cultural Transmission and Transformation of Japanese Mythology

– Focusing on “Princess Mononoke” by Hayao Miyazaki –

Hong, Seong-Mok

We believe that the difficulty of “Princess Mononoke”, an animated feature film directed by Hayao Miyazaki and released by Studio Ghibli in 1997, is due to the inclusion of the worldview of Japanese mythology as conveyed in Japanese mythology. This is because the animals that play an important role in this work, namely the boars, the dogs, and the deer, have their own images in Japanese mythology and are essential to understanding this work.

In Japanese mythology, the boar appears as a being that brings death to champions. This is why the boar is thought to have come to appear in “Princess Mononoke” as a being that places a death curse on the main character Ashitaka. It also seems that the ancient Japanese believed that the white dog had special abilities and was conceived of as an animal that helped people. Therefore, the white dog may have been chosen as the animal to help Ashitaka and San. Deer have long been considered sacred in Japan, and are also regarded as pests that destroy crops. The dual nature of ‘life and death’ of the Deer God depicted in “Princess Mononoke” is a manifestation of the deer’s dual nature as a sacred animal and as a vermin that destroys crops. In other words, the double-sidedness of the deer is reflected not only in their appearance but also in their characteristics.

Key words : Princess Mononoke, Japanese mythology, wild boar, white dog, deer

투 고 일 : 2023년 07월 14일

심 사 일 : 2023년 07월 19일

게재확정일 : 2023년 08월 04일